

～家庭 研究実践～

朝食の在り方を見直すことで、 毎日の朝食を大切にしようとする心情を育てる学習

～6年「いためてつくろう 朝食のおかず」の実践を通して～

中野 泰明

I はじめに

平成29年3月に次期学習指導要領が公示され、今後の家庭科教育の方向性が示された。今回の改訂では、空間軸と時間軸の視点から学習対象が整理され、小学校家庭科における空間軸の視点は、主に自己と家庭、時間軸の視点は現在及びこれまでの生活である。これは、小学校段階における家庭科が、身近な生活に軸を置き、空間的、時間的な広がり基礎となる部分を担っていると言える。

本校においては、「家庭科の学習は役に立つ」と考えている児童が9割以上おり、学習に対する有用感が高いと言える。また、これまでの研究の成果として、「持続可能な社会」

を目指して自分たちの生活を身の回りの環境との関わりという視点で捉えられるようになってきている。しかし、家庭科の学習は、「将来（自立）のため」と考えている児童が7割以上で、学習したことが現在の家庭生活をよりよくすることに結び付いていないという課題がある。そこで、本実践では、自分たちの家庭生活で行われている、当たり前と思われることに改めて目を向け、生活の課題を発見し、解決への見通しをもつことで、家庭生活を大切にしようとする心情を育む学習を目指した。児童にとって、何気なく繰り返されている日常生活を、科学的な理解や実感を伴った理解を通して見つめ直すことで、自らの家庭生活を大切にしようとする心情を育むようにした。

事前調査の結果、朝食を食べる児童は85%で、ほとんどの児童が毎日朝食を食べていることが分かった。また、主に朝食を作るのは、ほとんどの家庭で保護者であり、自分で調理をしている児童は少ないことが分かった。さらに、朝食の重要性については理解しているものの、なぜ重要なのかを理解している児童は少数だった。

そこでまず、朝食の役割について、科学的に理解することを重視した。ここでは、なぜ朝食が大切なのかについて実感を伴って理解することが大切であると考えた。次に、各家庭での朝食について振り返り、自分たちが食べている毎日の朝食の在り方を見つめ直すことで、題材の課題を設定した。ここでは、題材前に実施した朝食記録の活用や一般的な朝食のモデルとの比較を通して、自己の生活を見つめ直すことを大切にしたい。

さらに、朝食づくりに適している「いためる」という調理方法による実習を通して、朝食に合う簡単なおかずを自分なりに工夫したり、材料や目的に応じていため方を工夫したりする力の育成を目指した。これらの学習を通して、毎日の朝食を大切にしようとする心情と家庭で朝食を作ろうとする実践的な態度を育むことをねらいとした。

II 研究の目的と方法

本研究では、自己の生活を見つめることで、家庭生活を大切にしようとする心情を育むために効果的な手立てを明らかにした。そのために以下の3つの視点から授業や児童の様子について分析する。

- 解決すべき課題を設定するための指導の充実
- 科学的な理解・実感を伴った理解を図る指導の充実
- 家庭生活を大切にしようとする心情を育む自己評価



学習課題を設定する児童の姿

「家庭科研究実践

六年『いためてつくろう

朝食のおかず』の実践を通して」

Ⅲ 結果と考察

1 解決すべき課題を設定するための指導の充実

(1) 結果

本実践では、自己の生活を見つめ、解決すべき課題を設定するために、題材に入る前に、1週間の朝食について記録をした（資料1）。具体的には、朝食の在り方について、「何を食べたのか」「誰が作ったのか」「作るのにどれくらい時間がかかったのか」「誰と食べたのか」について記録した。また、一般的な朝食のモデルを複数提示することで、自分の朝食と比較ができるようにした。

食べたものだけではなく、様々な視点から記録・比較することで、朝食に関する問題点が明らかになると考えた。また、問題点から解決すべき自己の課題を設定することで、その課題に必要感が生まれ、家庭生活を大切にしている心情にもつながると考えた。

児童は、「野菜を食べている日が少ない。」「パンは食べているけれど、おかずが少ない。」「毎日同じようなものを食べている。」「いつもお母さんが作っている。」などの問題を見だし、そこから「バランスのよい朝食にするために、自分にできることを考えよう。」「短時間で栄養がとれる朝食を自分で作れるようになろう。」というように、自分が解決すべき適切な課題を設定することができた。

月日	食べたもの	作った人	作るのに かかった時間	一緒に食べた人
6月8日	白米、白玉焼、キャベツ、トマト、オクラ、アスパラ、ミニトマト、ベーコン	お父さん・お母さん	約20分	お父さん・お母さん・着・自分
6月9日	白米・白玉焼・キャベツ・トマト・オクラ・アスパラ・ミニトマト・ベーコン	お父さん	約20分	お父さん・着・自分
6月10日	白米・白玉焼・キャベツ・トマト・オクラ・アスパラ・ミニトマト・ベーコン	お母さん	約20分	着・自分
6月11日	白米・白玉焼・キャベツ・トマト・オクラ・アスパラ・ミニトマト・ベーコン	お母さん	約20分	着・自分
6月12日	白米、白玉焼、キャベツ、トマト、オクラ、アスパラ	お父さん・お母さん	約20分	お父さん・お母さん・着・自分
6月13日	白米、白玉焼、キャベツ、トマト、オクラ、アスパラ、ミニトマト、ベーコン	お父さん・お母さん	約20分	〃
6月14日	白米、白玉焼、キャベツ、トマト、オクラ、アスパラ	お父さん・お母さん	約20分	〃

資料1 児童が記録した「朝食調べ」



写真1 解決すべき課題を設定する児童の姿

(2) 考察

次期学習指導要領においては、目標(2)として、「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。」ことが明記されている。このことから、家庭科の学習が、まず日常生活の中から問題を見だし、課題を設定することから始まるということが分かる。従来から大切にしてきた問題解決的な学習の一層の充実が求められている。

本実践では、題材の導入前に家庭生活の状況を記録する「0時」の段階を設けたことで、問題を見いだすことにつなげることができた。また、できる限り様々な視点から記録することで、自分の生活を改めて見つめ直すきっかけとなり、家庭生活を大切にしている心情の育成につながった。さらに、各家庭によって家庭生活には違いがあるということと比較することで、問題点がより明確になり、解決すべき適切な課題設定へとつなげることができた。

2 科学的な理解・実感を伴った理解を図る指導の充実

(1) 結果

本実践では、題材を通して、朝食の重要性を意識することができるよう、朝食の在り方を見つめる際に、まず朝食の役割に目を向けさせた。事前調査から、児童は、朝食が大切であるということはある程度は理解していたが、なぜ大切なのかという理解までには至っていないことが分かった。

そこで、朝食の重要性について科学的な理解や実感を伴った理解ができるように、科学的な根拠を示したり、栄養教諭の話を紹介したりした。朝食を食べるという「当たり前」に改めて目を向けるこ

とで、朝食を大切にできる心情が育まれると考えた。

今回は朝食の役割についてポイントを絞った上で、児童に提示することを大切にして、栄養教諭が作成したプレゼンテーション資料を活用した(資料2)。「体にスイッチ(体温上昇)」「頭にスイッチ(脳のエネルギー)」「おなかにスイッチ(排便)」という3つの視点から、数値等のデータを示しながら、児童に朝食の役割を伝えた。

児童にとっては、当たり前のように食べている朝食の役割について改めて考えるきっかけとなった。事後調査では、朝食の役割について、上記3つの視点から理解している記述が多くあり、具体的な数値等のデータを提示することで、朝食の重要性を科学的に理解したり、実感を伴って理解したりする児童の姿が見られた。

(2) 考察

本実践において、朝食の役割について、栄養教諭の話をもとにして、科学的な理解、実感を伴った理解を図ったことは、当たり前のように食べている朝食が大切であり、様々な根拠をもって作られているということに気付かせることができ、朝食を大切にしようとする心情を育むのに有効であった。また、題材の導入段階で、朝食の重要性を強調したことは、題材を通して、児童が必要感をもって学習に取り組むことにも効果があった。本時以降も、朝食の重要性を踏まえて、真剣に学習する姿が多く見られた。

一方で、科学的な理解や実感を伴った理解を図る際には、専門的知識を有したゲストティーチャーの活用が考えられるが、ねらいに合わせて活用方法を吟味する必要がある。

3 家庭生活を大切にできる心情を育む自己評価

(1) 結果

本実践では、課題に対しての振り返り(朝食の在り方を見つめ直すことができたか、適切な課題を設定することができたか)と家庭との関わり(課題を解決して家庭生活中で生かしている姿)という2点から自己評価をすることで、家庭生活を大切にできる心情を育んだ。児童の振り返りには、「自分の朝食を見直して、それに合った学習課題をつくることのできた。」「家で朝食を簡単に作れるようになりたい。」などの記述が見られ、学習と家庭との関わりという視点から、学習を振り返る姿が見られた(資料3)。また、事後調査から、題材中に自分で朝食を作った児童が約30%いることが分かり、徐々にではあるが、朝食を自分でも作ってみようとする実践的な態度も育ってきた。

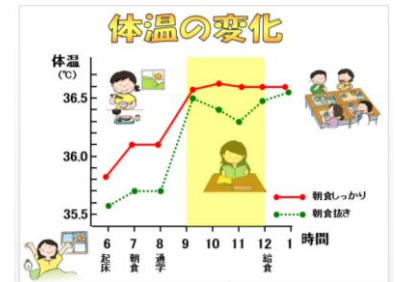
(2) 考察

次期学習指導要領においては、自らの学習を振り返ることを大切にしている。家庭科においては、この振り返りを、いかに家庭生活と結び付けるかが重要であると考えられる。

本実践では、課題に対しての振り返りで自らの学習を振り返るだけでなく、家庭との関わりで学習を捉える視点をもたせたことで、家庭科の学習は、家庭で活用するということを意識させることができた。自分が家庭生活において果たせる役割は何か、今の家庭生活をよりよくするにはどうしたらよいかを考えることができ、家庭生活を大切にできる心情を育むことにつながった。



写真2 本時の板書



資料2 朝食の役割例

①「朝食の在り方を見直して、学習課題をつくる。」

今日の学習を振り返って	家庭では…
自分の朝食を見直して、それに合った学習課題をつくることに決めた。	自分で作るよさを教わりたい。
朝食を摂ると体温が上がることを知った。授業中に集中できる。	朝食を食べたい。
朝食を摂ると排便がスムーズになることを知った。	朝食を食べたい。

資料3 実際に児童が記述した振り返り

IV まとめ

本実践では、児童が朝食の在り方を見直し、適切な学習課題を設定して学習を進めることで、家庭生活を大切にしようとする心情を育むことができた。以下に、学習を通しての児童の振り返りを紹介する。

- ・野菜を取り入れて、実際に朝食を作って、食べてみたい。
- ・たまに朝食を作っているけれど、もっと作ってみたい。
- ・朝食が自分の体に必要だということが分かり、これからは朝食をきちんと食べたい。
- ・家族と一緒に、朝食について話をしてみたいと思った。

上記の記述からも、本実践を通して、朝食を食べるという「当たり前」に改めて目を向け、見つめ直すことによって、毎日の朝食を大切にしようとする心情を育むことができたことが分かる。以下に、研究の成果と課題を挙げる。

1 成果

- 題材に入る前に家庭生活の様子を調査・観察する活動を設定したり、自分の生活の様子を記録したりすることによって、児童は自己の生活を見つめ、そこから問題を見だし、適切な課題を設定した上で、必要感をもって学習に取り組み、家庭生活を大切にしようとする心情を育むことにつながった。
- 数値やデータ等を提示することで、児童は日常的に繰り返されていて「当たり前」と捉えていることを、科学的に理解したり、実感を伴って理解したりできた。科学的な理解や実感を伴った理解によって、家庭生活が様々な根拠をもって営まれていることに気付き、家庭生活を大切にしようとする心情を育むことにつながった。
- 現在の家庭生活との関わりという視点を振り返りに入れることによって、学習が家庭生活と結び付いているということを意識して、家庭生活を大切にしようとする心情につながった。

2 課題

- 設定された解決すべき課題は、個々の家庭生活の実態によって様々だが、それらの課題に応じて、その後の題材の学習展開を柔軟に考え、修正していく必要がある。
- 設定した課題を解決するための力（技能、思考力・判断力・表現力等）を確実に身に付けるための学習展開、学習活動を工夫する必要がある。

V 主な参考文献

- 小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 平成 20 年 8 月
- 小学校学習指導要領 家庭編 文部科学省 平成 29 年 3 月
- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申） 中央教育審議会 平成 28 年 12 月 21 日
- 初等教育資料 No. 922 「自分の成長と家庭生活の大切さを実感し、実践への意欲を高める家庭科の授業づくり」 文部科学省 東洋館出版社 平成 27 年 1 月号
- 初等教育資料 No. 947 「家庭科において育成を目指す資質・能力」 文部科学省 東洋館出版社 平成 28 年 12 月号
- 初等教育資料 No. 954 「学習指導要領改訂のポイント 家庭科」 文部科学省 東洋館出版社 平成 29 年 6 月号

家庭科部会

司会者 工藤 知里（旭川市立東栄小学校教諭）
助言者 岡田みゆき（北海道教育大学旭川校教授）
齋藤眞美子（北海道教育大学旭川校非常勤講師）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

朝食の役割について（栄養教諭の活用）

<授業者から>

栄養教諭をゲストティーチャーとして教室に招くことも考えたが、今回はポイントを絞って短時間で朝食の役割を伝えたかった。3つの視点について数値等を基に示すことで、朝食の重要性について十分理解は深まるのではないかと考え、ICTを活用することにした。ただし、科学的な理解、実感を伴った理解ということをさせるのであれば、もう少し手立てが必要だったかもしれない。



<参観者から>

- 子供たちの実態として、「なぜ、朝食を食べて、体温上昇させる必要があるのか。」が落ちていない。朝食を食べないと、太りやすいということや簡単な計算の速度が落ちるといったようなことから実感を伴った理解につなげることができたのではないか。
- 体温上昇によって、免疫力があがることや代謝が上がることを伝えると、科学的な理解にもつながっていくのではないか。
- 実際に体温を計測して記録していくことで、科学的な理解、実感を伴った理解につながったのではないか。
- ICTを活用することで、栄養教諭がいない場合にも、いつでも同じように授業を進めることができる点で有効であった。

朝食の在り方を見直して、課題を設定する場面について

<参観者から>

- それぞれの家庭生活の状況が違う中で、朝食を見直し、課題を設定したときに、題材を通して個々の課題が解決されればよいのか。題材で指導すべき内容とどう関連させるのかが難しい。
- 最終的には調理実習があるので、作れるようになるという技能面にも目を向けさせる必要があったのではないか。
- 朝食を食べていない子供には、「どうして食べていないのか。」ということを事前調査しておく、授業構想に役立ったのではないか。
- 題材を見通して、適切な課題を設定している子供も多くいた。

授業の感想・その他

- 社会的にも朝食の重要性が言われている中、朝食の欠食が増えている。学校教育として、指導者が押さえておくべきことを理解し、子供たちにとって生きて働く力を身に付けさせてほしい。
- 家庭の状況は違うので、家庭批判にならないように、自分にできることを考えさせることが大切。

II 助言者からの講評

(1) 齋藤眞美子先生から

附属で続けている研究の積み重ねが、子供たちの学習の雰囲気を作っている。しっかりとした学級経営が基盤となっている。課題をもち、解決していくという学習展開にも慣れていて、意欲的に学び合い、しっかりと学習を振り返ることもできていた。学級経営のポイントなどを共有できるといいのではないかな。

今年度からの研究では、学習全体を見通す力と、積極的に関わる力を重視しているように感じた。子供たちは、教師が提示した課題（朝食の在り方を見直して、学習課題をつくろう）に対して、この題材ではどのような学習をしていけばよいのかをそれぞれが意識していた。ある子供が設定していた「朝食には、どのようなものを、どれくらい食べればよいのか考えよう。」という学習課題が、今後に広がり期待できる、よい学習課題であった。

自ら進んで学習に取り組む態度が育っている。何かを見ながら、聞きながらワークシートにメモをする姿がたくさん見られた。中学校との接続という観点からも、小学校高学年では大切にしたい学習態度である。また、何かを考えるときに、子供たちが自然と話し合っていた。これからは、ペアやグループで意見を交流しながら、自分たちの意見を変えていけるような学習が大切である。



(2) 岡田みゆき教授から

3月に次期学習指導要領が公示された。その中で、目標の(2)として、「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を快活する力を養う。」が挙げられている。いわゆる「課題解決学習」であり、その先には、「アクティブ・ラーニング」があるのだと思う。これが前面に出てきたということで、今後家庭科では益々今日のような授業が求められるようになる。そういう意味でも、提案性のある授業だった。

今日の授業は、(2)の中でも、「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定する」という部分を意識した授業であった。ただ「課題を出してみましょう。」では、なかなかよい課題は出てこない。仕掛けが必要。今回は、「1週間の朝食調べ」と「4つの例との比較」という仕掛けがあった。子供の力だけではなく、教師がいかに授業に仕掛けをするかが大切である。課題意識の低い課題ではなく、その子なりに深い課題を設定していく必要がある。

今後難しい点としては、それぞれの子供が課題を設定するところまではいくと思うが、個々の課題を題材全体の中でどのように解決していくのか、また、自分の課題を解決しながらも、どのように他者の課題についても一緒に学習していくかということ。題材全体を通して、子供たちがモチベーションを下げずに学び続けるにはどうしたらよいかということ今後考えなくてはいけない。先生方が、いろいろな実践を持ち寄って研究を進められるとよい。

これからは、「何を知っているか」だけではなく、「何ができるか」が大切になってくるので、技能を意識する必要がある。今回の題材では、「いためる」という技能を家庭で応用できなくてはいけない。子供たちが設定した課題が、技能面と結び付いているのかも考える必要がある。